

激情的な愛から昇華された愛へ ——『マノン・レスコー』から『新・エロイーズ』まで

ジゼル・ベルクマン

(国際哲学コレッジ)

(訳=藤原真実)

恋愛小説はたしかに危険なフィクションである。1737年に大法官ダゲソーが小説の発行禁止を決定したのは、小説が「人心に恋愛という致命的な毒を行き渡らせる」という理由からだった。とはいえ、優位に立ったのは小説の方で、1680年から1760年までの間に1440点もの小説がフランスで出版されたが、それらの小説の多くが「愛という猛毒」をせっせとまき散らした。読者、とりわけ女性読者がその毒に酔いしれたことは言うまでもない。

ロベール・シャールに始まり、クレビヨン・フィス、マリヴォー、プレヴォー、ルソーを経てショデルロ・ド・ラクロへと至る啓蒙期を、恋愛小説の黄金時代とみなせるとすれば、感傷のものであれ、激情のものであれ、リベルタンのものであれ、それには主に二つの理由が関係しているように思われる。その一つは、啓蒙期をとおして、人々は情念の再評価の場に居合わせていたということである。啓蒙期以降、情念は力学的原理、原動力と見なされるようになるが、そのことは、『百科全書』の項目「情念」(ジョケール執筆)にもはっきり示されている。「情念こそが、あらゆるものを動かし、宇宙のタブローを息づかせ、その様々な部分にいわば魂と生命を与えるのである。」その結果として、世俗的な愛も再評価されるようになる。そのことは、イヴォン神父による『百科全書』項目「愛」の実直で凡庸な文体の中にも示されている。「愛せる人は誰でも有徳である。有徳な人は誰でも愛すことができるとさえ言えるだろう。生殖不能は身体の欠陥であるのと同様、愛を行えないのは魂の欠陥である。」¹そこに小説の驚くべき可塑性(回想録体小説、書簡体小説)が結びつき、さら

にこの可塑性は、18世紀をとおして、発展し続ける一種のリアリズム、ディドロが画家や「歴史的コント」²の作者たちに唱道する「真実味のあるちょっとしたディテール」のリアリズムとしばしば手を組む。こうして形式が自由になったおかげで、小説はおそらくそれまでなかったような仕方で愛を語れるようになり、きわめて繊細なニュアンスを描いたり、いかにして「感じやすい心の中ではすべてが感情になる」(『新・エロイーズ』第五部、書簡五)のかを示したりできるようになってゆく。

このように啓蒙期の小説は、その中でありとあらゆる恋愛感情の形が探究される、まさに感覚の実験室なのだ。それは、マリヴォーの『リアンヌの生涯』を例に取るなら、「愛することの喜び」の繊細な分析であり、「愛は美術と同様、自然を助ける技術に過ぎない」と述べる、恐ろしく背徳的なメルトウイユ夫人にとって

¹ 『百科全書』の項目「喜び」において、ディドロが愛による結合の悦楽とその豊かさを歌い上げるときの叙情性を想起してもよいだろう。「魂を持っているあなたよ、答えてほしい。自然がいたるところから我々の欲望に与える諸々のものの中で、あなたと同じように考えたり感じたりし、同じ考えを持ち、同じぬくもりや同じ激情を感じ、柔らかで華奢なその腕をあなたの腕の方へ差し伸べてあなたを抱きしめる存在を所有し享受することほど、——その愛撫の後にはあなた方のどちらかに似た存在、その最初の動きの中であなた方を探してあなた方に抱きつこうとするであろう存在が誕生するだろう。あなた方はその存在をそばに置いて育て、ともにその存在を愛するだろうし、あなた方が年老いたらその存在があなた方を守り、あなた方を常に尊敬するだろう、その存在の幸福な誕生があなた方を結びつけていた絆をさらに強めてくれたのだ——そのような存在ほど我々が追求める値うちがあるもの、それを所有し享受することが我々をこれほど幸福にできるものがあるだろうか。」(原註。以下、(原註)の指示がない場合はすべて訳者による補注である。)

² この忠告は、ディドロの『ブルボンヌの二人の親友』の中に見出される。「だから私は歴史的コントの作者たちにこう言おう。——あなた方の描く顔は美しいと言えなくはないが、額のイボや、唇の傷や、鼻のわきの天然痘の跡のように、現実にあるような顔にする何かが欠けている。」(原注)

ディドロはその『ブルボンヌの二人の親友』の最後を締めくくる物語論において、物語(コント)を「超自然的なコント」(ホメロス、ウェルギリウス、タッソー風の)、「愉快的なコント」(ラ・フォンテーヌ、アリオスト風の)、「歴史的コント」の三つに分類し、歴史的コントの例としてはスカロンとセルバンテスの短編を挙げていることからわかるように、ここでhistoriquesという語は、いわゆる歴史的という意味ではなく、実話の印象を与えるような、迫真的、という意味で用いられている。

は、覆いをはぎ取って中身を裸出させることにほかならない。

この膨大な小説リストの中から、私は次の二点の傑作小説を選んだ。(それらのフル・タイトルをわざと省略せずに引用しよう。小説の楽しみはフィクションのプロトコルプロトコルをこうして解明するところから始まることを感じてほしいからである。) アベ・プレヴォーの『デ・グリユー騎士とマノン・レスコーの物語』、そして『ジュリー、または新・エロイーズ、アルプスの麓の小さな町に住む二人の恋人たちの書簡、ジャン＝ジャック・ルソーによってまとめられ、出版される』である。その理由は、『告白』に書かれているように³、単にルソーがプレヴォーの熱烈な読者だったからではない。二つの小説の間では、愛の概念が重大な変貌を遂げているように思われるからである。

「私は彼女をあまりにも激しい情熱で愛するので、彼女は私を誰よりも不幸な男にするのです」——ルノンクール(物語を書き取ったとされる「或る貴族」)に自らの悲劇的な物語を語るデ・グリユーは、マノンについてそう語る。そして『マノン・レスコー』の初版から30年後、『新・エロイーズ』の女主人公ジュリーは、この偉大で崇高な小説の最後、悲劇的な死を遂げる前の最後から2番目の手紙で、「真実の愛の後にいつまでも生き残るあの優美さ」⁴を引き合いに出す。30年の間に、激しい情念は小説的な別の概念、純化され昇華された愛へと変化したのだろうか。逃れられない宿命として体験される情念から、犠牲にされ、別の次元の感情生活へと切り替えられた肉体的な愛へと、抗いがたい情念から昇華へと変化したのだろうか? この問いに答えるのが本稿の目的である。

前置きとしての説明

18世紀小説の序文では、作者は自らを草稿の「編者」、実話の収集者と称し、予防線⁵として道徳論を援用する。同様に、『マノン・レスコー』にも、『或る貴族の

³ ルソーは特にレ・シャルメットのヴァランス夫人のもとで小説を読んだことを記している。「私はクリーヴランドの空想的な不幸の物語を何度も中断してはむさぼるように読んだので、それは自分の不幸以上に私をはらはらさせたように思う。」(原註)『告白』第5巻。(Jean-Jacques Rousseau, *Œuvres complètes*, Gallimard, « La Pléiade » (abréviation: OC), tome I, p. 220.)

⁴ 第5部、書簡12。(OCIII, p. 688.)

回想』の架空の作者であるルノンクール侯爵による緒言が付されている。〔『マノン・レスコー』が発表された1731年には〕プレヴォーはすでに『或る貴族の回想』を6巻まで出版していた。読者の便宜を図ってこの話の全体を別刷りにした理由を述べた後で、「編者」は、「彼〔読者〕はデ・グリユーの行動の中に、情念の恐るべき力の实例を見るだろう」、また「作品全体は楽しく実践に移された道徳論である」と付け加えている。『新・エロイズ』の装置はさらに複雑で、二つの序文はいずれも読者に小説を読むのを断念させようとしているように見える。というのも、まず「短い」序文では、「大都市には見世物が必要であり、墮落した民には小説が必要である。私は当代の習俗を見た、だからこれらの手紙を出版した。」（二行目は『危険な関係』の題辞として使われることになる）とあり、続く「第二序文」では、「貞潔な娘は恋愛小説など読まない」とあるからである。こうした装置を鋭く分析するルソーの専門家イヤニック・セイテは、「小説を恋愛物語と同一視し、いっさいの虚構物語は悪だと言うことは、すべての恋愛物語はみな習俗に対して一様に有害だとしてそれらを禁じるべきだと断ずることとは異なる」⁶と指摘している。

次に、二つの小説の語りの仕組みについて簡単に述べる。17世紀の小説から摂政時代の小説への過渡期に活動したプレヴォーは、強制された聖職者の道と軍職への憧れの間で引き裂かれながら、人生の紆余曲折の中に、小説の波乱に満ちた筋を豊かに汲み取った天才的な物語作家である。『マノン・レスコー』は回想録体小説で、枠物語の中にもう一つの物語がはめ込まれ、はめ込まれた物語の方が作品のほぼ全体を占めている。それがデ・グリユーが「貴族」に語る物語である。それより2年前、「貴族」はデ・グリユーにアメリカへと護送される恋人について行くための資金を提供して援助する。当時は実際に娼婦を植民地に送って入植させることがあった。この入れ子式の物語の手法は、ロベール・シャルの『フランス名婦伝』（1713年）がその好例だが⁷、物語の受信者を読者との媒介として理想的な位置に置くこ

⁵ 原文はparatonnerre（避雷針）。ジェラルド・ジュネットがパラテキスト論『スイユ』で用いた用語で、読者の批判を想定してあらかじめ作品の難点を序文の中で指摘すること。

⁶ Cf. l'édition de Y. Séité, *Rousseau et Henriette, correspondance*, Manucius, 2014.

⁷ 幾人かの批評家が指摘したように、『マノン・レスコー』とロベール・シャルの『フランス名婦伝』にはいくつかの共通点がある。その筆頭に挙げられるのは、マノンと、第6話を構成する「デ・フランとシルヴィーの物語」の主人公シルヴィーの類似性である。（原註）

とで、すばらしい「現実効果」をもたらしている。

一方、1756年から1758年にかけて執筆されたルソーの『新・エロイズ』は、二大論文の後、『エミール』（教育論）と『社会契約論』（政治哲学論）の直前の1761年に発表された。この書簡体小説は、1800年までに70以上の版を重ねた18世紀のベストセラーの一つである。読者たちは自らを主人公たちに重ね合わせて熱狂したので、ルソーと実際に文通する者も出たほどだった。——とりわけ思い出されるのは、『新・エロイズ』を知り尽くした「アンリエット」（ジュリーの親友クレールの娘のように）と渾名された娘とジャン＝ジャックの間で行われた文通である。——ルソーは見事に書簡の対話体を利用し、各登場人物に固有の声とその調子を与えている。「编者」によって加えられた註は、或る種の距離感を作り出し、それが虚構の力を逆説的に強め、さらにグラヴロの版画がそれを増し加える。ルソーはこの版画家にこまかい指示を与えていた。

1. 『マノン・レスコー』、または「情念の恐るべき力」

この短い小説の中にプレヴォーが見事に描き出したきわめて緻密な小説の織物は、主人公デ・グリユーを翻弄する波乱に満ちている。物語はピカレスク小説との共通点を多く持つ。上下関係の入れ替わり、お金とそれを手に入れる多少ともまっとうな弥縫策の重要性などである。物語の筋をざっと辿ってみよう。すべては雷の一撃〔一目惚れ〕で始まる。17歳の若者デ・グリユーは、アミアンで「品行方正で規律正しい生活」をし、哲学を修了する。マルタ騎士団に入る予定だが、司教からは聖職者になることを勧められている。父の家へ帰ろうとしていた日の前日、青年デ・グリユーとその親友ティバルジュは、アラスからの乗合馬車がやって来るのを見、旅籠までその後を追いかけてゆく。旅籠の中庭に、娘がひとり立っている。家族によって修道院へ送られたのだ。それを見たデ・グリユーは、雷の一撃を受け、それが彼の一生を決定づけることになる。——「彼女はあまりにも魅力的に見えたので、それまで男女の違いを考えたこともなく、若い女性を少しも注意して見たことがない、みんなから思慮深さと慎み深さを称賛されていたこの私が、突然燃え上がったかと思うと、逆上の域に達したのです。」——主人公の青年はマノンを連れて逃げ、パリで裕福な徴税請負人B氏の家の近所に新居を構えるが、その男がマノンに言い寄ることになる。一回目の裏切り、一回目の失望——マノンとB氏は青年

の父親に連絡し、彼を幽閉させる。幽閉を解かれると、デ・グリユーは神学の勉強に打ち込み、以前のように思慮深く操正しく1年を過ごす。論文審査の日、マノンが審査に出席し、彼は再び彼女の魅力に屈する。それ以後は、吉の時期（詐欺による収入、愛の快樂）と凶の時期（投獄、脱獄のきわどい成功）が交互に繰り返され、そのリズムに合わせるように、良家の子息デ・グリユーは、パテン地獄へのいわゆる地獄下りを始める。次のエピソードについて考えてみたい。デ・グリユーはマノンと一緒にシャイヨーの家に移るが、僅かな財産を盗まれてしまう。そこで再起を図るため、青年はいかさま賭博を始め、マノンは年老いた放蕩老人G...M...（頭文字が現実感の効果をあげている）に身を委ねる。デ・グリユーは、妹に売春をさせる兄と共謀し、自分がマノンの兄だと称して、二人で放蕩老人から金を騙し取る。二人とも捕らえられ、彼はサン＝ラザール感化院へ、マノンは一般施療院へ収監されるも、デ・グリユーは一般施療院の役員の息子の力を借りてマノンを解放させる。大なり小なり荒唐無稽なそうした出来事の列挙はこのくらいにするが、さらにプレヴォーは文体の優美さとシチュエーションの俗悪さのコントラストを巧みに利用している。そのことは文献学の大家エーリヒ・アウエルバッハがその論考「中断された晩餐」⁸で的確に指摘したとおりである。

マノンに対するデ・グリユーの情念は、宿命の意図に操られるかのようであり、それだけにいっそう抗いがたい性質を帯びることになる。しかも二人の恋人の物語は、ヌーヴェル・オルレアン〔ニュー・オーリンズ〕の荒野でマノンが死ぬという悲劇的な結末に行き着く。多用される予弁法〔prolepsis〕はそのたびに不運の再来を予告する。「不運な一瞬によって私は再び破滅へと突き落とされたのです。」神学に没頭しようというときに再びマノンの誘惑に屈したデ・グリユーの言葉である。放蕩老人G...M...の前ではマノンの弟のふりをするをマノンの兄レスコーから提案されたデ・グリユーは、心中で次のように葛藤する。「いったいどういう宿命で私はこんなに罪を犯したのだろうか。愛は罪のない情念なのに、どうして私にとっては不幸と自墮落の源になってしまうのだろうか。」また、マノンと再会し、二人して老人G...M...から金を騙し取ろうと決めたときのことを回想するデ・グリユーは、

⁸ アウエルバッハ『ミメーシス——ヨーロッパ文学における現実描写』篠田一士・川村二郎訳、ちくま学芸文庫、下巻、第16章。

「私は長続きしない喜びと果てしない苦しみのために生まれてきたのです。大金が私を危機から救ったのは、もう一つの危機に私を突き落とすためにすぎなかったのです」と語る。愛はそのスパイラルの中に人を引きずり込む情念の宿命性として生きられる。批評家たちはこうした良心の葛藤を支配する神学的な観点をしばしば強調してきた。ジャン・ドゥプランは、マールブランシュ思想のプレヴォーへの影響を指摘している。『自然と恩寵についての論考』（1680年）の中で、マールブランシュは創造主の恩寵と贖罪者の恩寵を区別している。前者は煩惱を前提としておらず、「愛徳により完全に強められた自由な人間に与えられる」が、後者は「真実の善への愛に引きよせられるために快楽を必要とする弱い人間において効力を持つ」⁹。マールブランシュにおいて、恩寵によって選ばれた人間は、「無力な被造物、偽りの善、肉体的な幸福への愛をかきたてる混乱した快楽」からしだいに離れてゆき、「快楽を生み出す真実の原因を愛し、真実の善を愛するようにいざなう、賢明で、明晰で、良識的な快楽」¹⁰へと徐々に昇ってゆくとされる。じじつ、デ・グリユーは、物語の最後にマノンの悲劇的な死¹¹と自分の絶望を語った後で、自分が立ち直ったことや、神から恩寵を授かったことに言及している。「〔前略〕神は、これほど厳しく私を罰した後に、私の不幸と神が与えた罰が私の益になるよう計らってくれました。神が私を照らしたその光のおかげで、私は自分の出自と授かった教育にふさわしい考えを思い起こしました。心の中に少し落ち着きが生まれると、この変化はたちまち回復へとつながったのです。」こうして主人公は、マールブランシュがこだわったあの効力ある恩寵を享受することになる。しかしながら、情念の

⁹ Nicolas Malebranche, *Traité de la nature et de la grâce*, *Œuvres complètes*, Paris, t. 1, 2nd partie, article xxi, p. 339.

¹⁰ Nicolas Malebranche, *Traité de l' amour de Dieu*, *Œuvres complètes*, Paris, Sapia, 1837, t. 2, p. 248.

¹¹ 批評家ラ・アルプ（1739-1803）は、その『古今文学講義』において、プレヴォーの『クリーヴランド』や『キルリーヌの主任司祭』のような長編小説については強い疑義を呈しているが、『マノン・レスコー』を大いに評価し、結末を絶賛している。「不幸な恋人が、彼について行った荒野の真ん中で、苦しさや疲れに憔悴して彼の傍らで息絶えるときのデ・グリユーの境遇ほど痛ましい状況があるだろうか！正直に言って、この作品の結末を読んだときほど深い感動、悲痛な感慨を感じたことは、これまでほとんどなかった。（原註）

概念を許さない悲観的な方向へと舵を切る批評家たちもいる。サン＝ラザールでの収監中に、敬虔な友ティベルジュと交わしたきわめて興味深い話の中でデ・グリユーが語った理屈を、ティベルジュはジャンセニズムだと決めつける。なぜ自分の愛を宗教のために犠牲にしないのかと問うティベルジュに対して、デ・グリユーはこう答える。「ああ親しい友よ、[...]まさにそここのところでぼくは自分の惨めさと弱さを思い知るのさ。ああ！そうだと。自分の理屈のとおりに行動するのがぼくの義務なのだ。けれどぼくにはそれを実行する力があるだろうか。マノンの魔力を忘れるにはいったいどうしたらいいのだろう。」それに対してティベルジュは言う。「こう言うっては何だが、そういうきみもジャンセニストのうちに入るのだと思うよ。」これらの談話の神学的な方向性を正確に特定するのは実はとても困難なことだ。対話のスタイルがここでは曖昧さの原理として機能し、この曖昧性こそが登場人物たちの考え方を支配し、プレヴォーが小説の中に描く情念の描写に独特の魅力を与えているのである。

実際に、この情念の物語が宿命、あるいは天〔神〕に支配されているとすれば、主体としてのデ・グリユーは、情念に隷属した主体として、同時にまた過剰な情念に喜んで差し出された主体として、自らを描いている。プレヴォーの小説の主人公たちは、麻薬常習者のように情念に支配され、18世紀後半の「暗黒小説」を予告するきわめて荒唐無稽な筋の展開に翻弄される。プレヴォーがクロムウエルの息子として設定したクリーヴランド¹²の場合も、情念の興味深い病理を示しているデ・グリユーの場合も同様である。「逆上transport」という用語は何度も用いられる。たとえばデ・グリユーには二度目の誕生のような体験だったマノンとの初めての会話は次のように書かれている。「私の胸はそれまで思いも寄らなかった無数の考えに向かって開かれました。うっとりするような熱が血管の隅々まで行き渡りました。私は一種の逆上状態にあり、しばらくは声を自由に出すこともできず、目だけでその状態を表現していました。」¹³

情念の爆発の小説『マノン・レスコー』は、曖昧さの小説でもある。「貴族」に物語を語るデ・グリユーの内的視点は、マノンという人物の捉えがたさの側面を際

¹² 『英国の哲学者、またはクロムウエルの私生児クリーヴランド氏の物語。本人により書かれ、『或る貴族の回想』の作者により翻訳される』（ユトレヒト／パリ、1731-39年）

立たせている。——プレヴォーは『当世ギリシア女物語』¹⁴の中で、テオフェ〔女主人公〕の意図を不明瞭なままにしておくために、同じ手法を巧みに用いている。マノンの人物描写は小説の人物描写の中で最も美しいものの一つである。彼女は「不実」（何度も用いられる言葉）でありながら純真であり、男たちを支配する力を持ち、邪悪さと無邪気さの混合物で男たちを手玉に取る。マノンは金銭ずくの人物として登場するが、とはいえ、デ・グリユーも強調するように、彼女にとって一番重要なのは金銭ではない。「マノンはじつに風変わりな女性でした。あれほど金銭に執着のない娘はいなかったでしょう。ですが金が足りなくなる恐れがあると、一瞬も落ち着いていられなかったのです。」ところがその同じマノンは、金持ちの道楽者G...M...に身を任せるためデ・グリユーを捨て、別れの手紙でこう説明する。「わからないのですか、かわいそうな人、こんな状態に陥っては、貞節などくだらない美德だということが。パンにも事欠いているのに優しい愛情を示せると思うのですか。」さらにその先では、「私は常に彼女が誠実だと思い込んでいました。そこまで自分を偽る理由が彼女にあったのでしょうか。しかし彼女はそれ以上に浮気性でした、あるいはむしろ彼女はそれ以上のなにもものでもなかったのです。目の前に暮らしぶりのよい女性たちがいて、自分は貧しく困窮した状態にあると、彼女は自分で自分がわからなくなるのでした。」¹⁵ヌーヴェル・オルレアンでのマノンの最後の悔悛について言うなら、『当世ギリシア女物語』のテオフェの場合と同様、男性登場人物を介してしか近づけないだけに、最終的な贖罪の問題はいつそう複雑である。『失われた時を求めて』の語り手がアルベルティーヌに与えた表現を借りるなら、読者はこの「逃げゆく存在」について確かなことを知ることはないだろう。

¹³ アカデミー辞典の初版によれば、「Transport（激情）とは、比喩的にさまざまな情念をいう。喜びの激情（有頂天）、怒りの激情（逆上）。彼は喜びのあまり有頂天で、我を忘れていた。」同辞典第4版（1764年）には、「TRANSPORTとは、いわば我々を自らの外へ運び去る激しい情念をいう。[...] 彼は狂喜して我を忘れる。」とある。（原註）

¹⁴ *Histoire d'une Grecque moderne*, Amsterdam, 1740. プレヴォーの多くの小説と同様、一人称体小説である。語り手兼主人公はかつてコンスタンチノーブルに駐在したフランス大使。現地で親しくしていたパシヤのハーレムで見た幼い奴隷テオフェを身請けしてフランスへ連れ帰り、いつか自分のものにするために育てるが、思い通りにはならず、嫉妬と疑念に苦しむ。

¹⁵ *Manon Lescaut*, éd. Deloffre, Classiques Garnier, 1965/1990, (ML.), p. 110.

さらに、恋愛中毒にとりつかれたデ・グリユーもまたきわめて曖昧な人物で、一見ただけではわからないほど詐術に長けている。ディスクールの力が特別な重要性を持つこの小説においては、相手が敬虔なティベルジュであれ、サン＝ラザール感化院の院長であれ、自分の父親であれ、デ・グリユーもまたそのレトリックの詐術で操作したり、ごまかしたり、騙したりする人物なのだ。

プレヴォーにあっては、「楽しく実践に移された道徳論」をお目にかけてと言う序文の主張とはうらはらに、道徳的教訓を装う神学的ディスクールの先に、情念は制御不能な力として、何であれ完全に飼い慣らしたり教化したりできない力として現れる。ビゼーのカルメンが歌うことになるように、「恋はボヘミアンの申し子」、「掟なんかありゃしない」。デ・グリユーとマノンの恋はその衝撃的な例を示している。

II. 昇華され、理想化され、乗り越えられた情念：『新・エロイズ』

『新・エロイズ』の第一部から第5部までの間には数多くのことが起こるようであるが、ほとんど何も起こらない。それは何よりもまず、いにしへの恋愛小説なのだ。ジュリー・デタンジュと、サン＝ブルーと渾名された家庭教師は恋に落ちるが、貴族という自らの地位に執着するジュリーの父親は、二人の結婚に反対する。ジュリーは密かに恋人の子を身ごもって流産し、——このエピソードについて、ヴォルテールはたいそう愉快で非常に意地の悪い小品「新・エロイズまたはアロイジアについての手紙」の中で痛烈な皮肉を浴びせることになる——クレヴの奥方のように、尊敬しても愛してはいない男性、すなわちヴォルマール氏との結婚に同意する。恋の傷を癒すため、船で世界旅行に出たサン＝ブルーは、クラランでジュリーに再会、恋愛を純化された友情へと変えるために、ジュリーとともに、ヴォルマール氏の導きのもとで努力する。ジュリーは溺れた息子を救おうとして悲劇的な死を遂げるが、彼女の思い出は、クラランの友愛に満ちた小さな共同体メンバーの心の中にいつまでも生き続けることになる。

『新・エロイズ』における愛の感情は、『マノン・レスコー』とは全く別の展開を見せる。そこにも不吉な運命というモチーフが見出されはするが、登場人物たちの心理はまったく異なる。プレヴォーの主人公たちは最後には必ず自らの良心と和解する。『新・エロイズ』においては、愛の純粋な激しさと倫理的生活の要請は、

引き裂かれたままの状態で生きられるのだ。ジュリーという登場人物に着想を与えたエロイズ¹⁶と同様、ジュリーは父親の意志を受け入れてヴォルマル氏との結婚に同意することで、感覚的な幸福を犠牲にする。この小説の中では、愛は存在に意味そのものを与えるものとして、存在を生きることに値うちを与えるものとして現れるだけに、ますますこの犠牲は大きくなる。ジュリーはサン＝ブルーへの手紙の中で、見事にそのことを言い表している。「愛し合うために生きましょう、というあなたの言い方は不十分だと思います。生きるために愛し合いましょう、と言うべきだったのですわ。」¹⁷恋の情念は存在の感覚を増し加えるだけでなく、いっさいがそこから派生する第一の原動力、エネルギーの源をいわば象徴する。最初に触れた情念の再評価は、啓蒙の世紀では月並みな話題である。しかし、小説家であり思想家でもあったルソーにおいては、それ以上である。フロイトより前に、『新・エロイズ』の作者は、人間のあらゆる企図の根源にリビドーのエネルギーがあることを感じ取っていたように思われる。だからこそサン＝ブルーは、ジュリーのために計画した読書プログラムの中で、恋愛小説の読書を禁じるのだ。「本物の愛はほかのいろんな感情の中にまでその熱を運んで、新しい力でそれらを突き動かす烈々たる火」¹⁸であるのに、恋愛小説の読書は心を「弱らせ」、臍抜けにする、というわけである。この活力源は社会生活とはほとんど折り合わないので、慎重に扱う必要がある。エドゥアール卿がクレールに書いているように、サン＝ブルーのような愛は「弱さというよりは使い方を間違えた力」なのだ。なぜなら、「卓越した理性は偉大な諸情念を作る魂のそれと同じ力強さによってしか支えられないし、愛する女性に感じるのと同じ情熱を持たなければ哲学にも立派に奉仕することはできない」¹⁹からだ。それゆえ『新・エロイズ』は、情念を改心させ、それを「扱いやすい」ものにする方法を論じた本として読むことができる。『マノン・レスコー』は

¹⁶ 『アベラールとエロイズの手紙』によって知られる中世フランスに実在した女性（1092? -1164）。彼女に家庭教師として近づいた哲学者で神学者ピエール・アベラール（1079-1142）と恋愛関係になり、子供を産み、秘密裡に結婚までするが、エロイズの伯父が使者を送ってアベラールを襲撃させ、最終的にはふたりとも聖職の道に進む。

¹⁷ 『新・エロイズ』第1部、書簡61。（OCII, p. 167.）

¹⁸ 同所、書簡12。（OCII, p. 61.）

¹⁹ 同所、第2部、書簡2。（OCII, p. 193.）

愛の病理学を詳述しているが、『新・エロイズ』はその治療法を確立しようとした。ルソーにおいてはしばしばそうであるように、ジャン・スタロバンスキーが見事に分析した「病のうちなる治療薬〔毒をもって毒を制す〕」の原理にしたがい、病によって病を治療することが問題になる。愛の源が他者の面影の中にある以上、主人公たちは想像による埋め合わせ——ルソーの恒常的な特徴——の中に逃げ込む。恋人たちは二人とも、強烈に、想像のモードで生きる。とはいえ、二人の間で面影は同じ意味や機能を持たないことに注意しなければならない。サン＝ブルーにとって、自らの内に大切に保持されたジュリーの内なる面影 (image) は、護符、保証であると同時に現実存在を補うものでもある。「私の内にあるこの不滅の面影は、盾となって私を守り、運命の打撃に対して私を不死身にするでしょう」²⁰と彼は言う。サン＝ブルーがジュリーの肖像画の美しさを賛美する手紙は、彼女の不在の一種の埋め合わせであり、抒情あふれる傑作である。「おいで、愛しい面影よ、ただお前によって生きているこの心を満たしておくれ。流謫の地にまで私を追ってきて、苦しみのなかにある私を慰め、ついでに私の希望を蘇らせ、支えておくれ。この不幸な心はいつまでもおまえの侵されざる聖域だから、運命であれ人間であれ、そこからおまえを奪い去ることは決してできないだろう。」²¹

ジュリーはといえば、彼女はその内に神的モデル、「偉大な存在」を持ち、靈操〔靈魂の修養〕のモードでそちらへと自らを高めようと試みる。だからこそ彼女は最後の手紙で次のように宣言するのだ。「空想の国こそ、この世で住むねうちの唯一の国です。それ自身により存在する存在のほかには、存在しないもののほかに美しいものはありません。そのくらい人間的なことどもには何の価値もないのです。」この言葉は、まったく別の二つの射程で読解できる。想像の慰めがあり、「偉大なる存在」、精神世界の絶対的保証人の優位性がある。この目に見えない偉大なモデルへの彼女の信念に応じて、——そこにはルソーのプラトニズムのしるしが見える——ジュリーは、サン＝ブルーよりもはるかに積極的に、はるかに意志的に、自分の愛を取り除くのではなく、それを純化し、それを「矯正」し、変えようと試

²⁰ 同所、書簡10。(OCII, p. 220.)

²¹ 同所、書簡22。(OCII, p. 190.)

みる、今日の精神分析に照らして言うなら、昇華させようと試みるのだ。彼女はまたサン＝ブルーにもこの昇華を受け入れさせようと試みるが、そこにはアベラールとエロイズの手紙のモデルとの関係における興味深い逆転を見ることができる。「純愛」の一形態へと到達するために、エロス〔恋愛〕をフィリア〔友愛〕に変えることを目指すこの苦行には、神秘主義の響きのようなものがある。ここではできないが、ジュリーがサン＝ブルーへの不可能な愛を総合的に評価しながら、諦めから昇華へと徐々に高揚してゆく長大な書簡（第3部、書簡18）をじっくり解説する必要があるだろう。かいつまんで言うなら、彼女は古典的に、情念は人を欺くものとして、その評価を下げることから始める。「情念の魔力よ、おまえはそうして理性を幻惑し、思慮分別を欺き、気づかれないうちに本性を変えてしまう。人生のうちの一瞬だけ道に迷い、正しい道を一步だけ踏み外す。〔中略〕しまいには深淵の中に落ち込み、美德のために生まれた心を持ちながら、罪にまみれた自分を見出し、ぞっとして目覚めるのだ。」次に、キリスト教信仰とプラトン主義が混じり合う中で、ジュリーは「偉大な存在」へと高揚し、一種の靈操の状態へと恋人をいざなう。「永遠の存在を崇めなさい、わが尊敬すべき思慮深き友よ、〔中略〕存在するその者を介さずにはなにもものも存在しません。〔中略〕その神々しい典型を観想することで魂は自らを浄化し高めるのです。』²²

ルソーは魅力的な仕方で小説の時間——批評家アルベール・ティボーデが言った「小説には時間がある」という事実——を利用するすべを心得ていた。まさしく時間「の中で」諸情念は変化し、可塑性を獲得するのであり、その可塑性を、登場人物たちが鋭く分析するのである。サン＝ブルーが認めているように、ジュリーとヴォルマル夫人は同一人物でも別人でもある。「手強いジュリーが私を追い詰めてくると私はヴォルマル夫人のかげに逃げ込み、安心するのです。この避難所が奪われてしまったら、私はどこへ逃げればよいのでしょうか。」時間の中で人格の同一性が変化してゆくことは、17世紀にジョン・ロックが指摘した大きな哲学問題の一つだが、ヴォルマル氏はそのことを利用した。理性的で有徳な無神論者であるこのジュリーの夫には、「生きた眼」²³という魅力的な比喩がびたりと当てはま

²² 同所、第3部、書簡18。(OCII, p. 353.)

²³ ジャン・スタロバンスキ——『活きた眼』(大浜甫訳)理想社(1971年)参照。

る。愛は時間の中で生きているのであり、ジュリーはヴォルマール夫人となったのだから、ヴォルマール氏が有徳なマキャベリズムの感動的な手紙の中でクレールに説明しているように、「現在をもって過去を覆い尽くし」²⁴、時間の諸状態の間に不連続性を作り出すことにより、過去を無害化すること、ジュリーを妻の姿で覆い尽くすことにより、心を揺すぶるジュリーの姿を無力化することが必要になる。「彼〔サン＝ブルー〕が愛しているのはジュリー・ド・ヴォルマールではなくジュリー・デタンジュなのです。〔中略〕たしかに二人のジュリーはよく似ていますし、今のジュリーは彼にかつてのジュリーをたびたび思い起こさせます。彼は過ぎ去った時間の中で彼女を愛しているのです。まさにこれが謎の答えですよ。彼から記憶を取り上げてごらんください、恋も失ってしまうでしょう。〔中略〕彼にはいつも自分の恋人ではなく、まっとうな男の妻、私の子どもたちの母親が見えるように仕向けてやります。一枚のタブローを別のタブローによって消し去り、過去を現在で覆い尽くすのです。」²⁵

しかしこの操作に逆らおうとする何かがあるのもたしかだ。かつての愛は現在という冷たい灰の下でかすかに動き続けている。ジュリーの従妹で変わらぬ友であるクレールとはいえば、彼女自身の内に反対のもの、それまでは存在していなかった、意識していなかった恋が目覚めるのを知ることになる。それまで無意識の内に留まっていたサン＝ブルーへの愛、大切な親友の恋人であるだけに友であり続けるべき人に対する禁じられた愛だった。しかし、かつての現在は覆い尽くされることも、現在の中まで引き延ばされることもできないのと同様、かつての潜在性が現実化することもできない。かつてのエロスの恋愛が純化されたフィリアへと完全に変わらないのと同様、かつてのフィリア〔友愛〕がエロス〔情愛〕へと変わることもない。

以上のように、『マノン・レスコー』から『新・エロイズ』へと、小説における愛の扱い方の変化を示そうと試みてきた。30年の間に、情念は主体が理解しようと試みるだけでなく、制御しようと試みる感情になったといえないだろうか。『新・

²⁴ 第4部書簡14 (OCII, p. 511.)

²⁵ 第4部書簡14 (OCII, p. 509-511.)

『エロイーズ』から二十数年後、シヨデルロ・ド・ラクロの傑作リバルタン小説『危険な関係』は、冒頭の銘句として、『新・エロイーズ』の序文の一行：「私はこの時代の習俗を見た。だからこれらの手紙を発表した」を用いている。

ヴァルモン子爵とメルトウイユ侯爵夫人という放縦なカップルにとって、愛とは戦場であり、制御の対象でもある。身体と感情とことばを手なずけることは、好戦的な倫理学を閨房の遊戯の中に持ち込む背徳的な貴族たちにとって重大な関心事になっていた。メルトウイユ夫人にとっては、「征服せよ、さもなくば死を！」なのだ。それはあたかも、ジュリーが願った昇華から、諸価値の自由奔放な侵犯へと、鏡の通り抜けが完結したかのようなのである。情念の宿命性（『マノン・レスコー』）、理想化（『新・エロイーズ』）、理想の倒錯——これで振りだしに戻り、次は閨房の哲学やサドの主人公たちの侵犯の出番である。

Gisèle Berkman, « De l'amour passionnel
à l'amour sublimé : *Manon Lescaut* et
La Nouvelle Héloïse »

Printed by permission of Gisèle Berkman

訳：藤原真実（首都大学東京教授）